

十二世紀における義天版の書写とその伝持について

―訓点資料を手懸かりとした諸宗交流の問題―

宇 都 宮 啓 吾

一、はじめに

ヲコト点の歴史的研究において、従来よりヲコト点の体系的把握と分類、更にはそれぞれのヲコト点がどのような流派・学派の中でどの時期に如何に消長してきたかということが明らかにされている。そして、そのような研究から、ヲコト点の消長が単一の流派・学派内においてのみ起こっているものではないことが知られ、教学面における諸宗派・流派相互の交流が訓点資料の面から想定し得る状況にあり、このような観点からの研究も進められつつあるように思われる。

例えば、築島裕博士は「古訓点資料に現れた十一・十二世紀の仏教諸宗教学の交流―園城寺を中心として―」（『後期撰関時代史の研究』古代学協会 吉川弘文館 平2・3）において、園城寺所用の西墓点と他寺との交流を中心とする南都古宗・天台宗・真言宗の諸宗間における学問上の交渉について、訓点資料を手がかりとして述べられてお

り、訓点資料を手懸かりとした諸宗の交流の分析に関しては今後とも検討されるべき課題と思われる。

訓点語の研究は、加点の背景にある宗派やその他の言語的環境に立脚した上で、その言語的特質等を明らかにするものであり、本稿も十二世紀における訓点語研究の一階梯として、当時の訓点資料の背景にある聖教の書写と伝持について考察するものである。

本稿では、そのような立場のもと、高麗統感経、いわゆる義天版の書写と伝持の問題を取り扱って行きたい。

二、問題の所在

ここでは、本稿で取り扱う義天版とその訓読との関わりについて述べ、そこから本稿における問題の所在を明確にしておく。

十世紀末に開版された宋版一切経は、日本においては東大寺僧齋然による将来によって当時の仏教界のみならず貴族社会に大きな衝撃を

もって迎えられている。また、当時の朝鮮半島を支配していた高麗にも大きな影響を及ぼしており、とりわけ、第十一世文宗の第四王子であった義天（諱は煦）を中心として高麗仏教界は未曾有の隆盛を極めたと言われている。この義天が宋版一切経の影響を受けて刊行した大藏経が高麗統藏経であり、その概要は肅宗六年（一〇九〇）に刊行された『新編諸宗教藏総録』、いわゆる『義天録』から知ることができ、この高麗統藏経たる義天版はその刊行に際して義天が日本にも諸経の希本を求めていたことから、日本においても囑望されていたらしく、実際にその輸入の形跡が諸経の奥書から認められる。

そのような、日本における義天版の輸入の様を知る資料として、例えば、東寺観智院に所蔵されている『釋摩訶衍論通玄鈔』（29-13）巻第四の奥書が挙げられる。

「嘉応式年四月二日」

正二位行権中納言兼大宰府師師藤原臣季仲

依仁和寺 禪定二品親王 仰遣

使高麗国請来即長治二年五月西五月中旬従太

宰差専使奉請之行

本書から、義天版の輸入の一つが仁和寺禪定二品親王（白河院皇子中御室寛行）の命に基づく大宰帥藤原季仲によって行なわれたことが知られる。

本書には、院政期頃（長治二年以降）の加點と考えられる円堂點が

十二世紀における義天版の書写とその伝持について（宇都宮）

施されており、この加點に関して築島裕博士は次のように述べられている。¹⁾

禪定二品親王は白河院皇子中御室寛行であり、この本がその請によって高麗国から齎せられたことが知られ、又、その最初に加點された時期も、長治二年以降であることを知る。釈摩訶衍論及びその関係の書は、多く円堂點が加點されてゐるが、それにはこのような背景があつたのであらう。

右の指摘からも知られるように、義天版の書写と伝持、そして、その加點の問題は院政期における漢文訓読史上、注目すべき問題と考える。

そこで、本稿では、義天版関係聖教の訓読活動解明の一階梯として、義天版の書写と伝持の問題を検討していく。

三、義天版の書写と加點資料

まず、義天版を書写・加點したと考えられる資料についてその書写や伝来、加點の問題について個別に検討していく。

『弘贊法華傳』二帖（東大寺図書館） 第五群點
（第一帖奥書）

弘贊法華傳者宋人莊永蘇景依予之勸且自高

麗国所奉渡聖教百卷内也依一本書為恐散

失劬俊源法師先令写一本矣就中蘇景等

婦朝之間於壹岐嶋遇海賊乱起此伝上五卷

入海中少湿損雖然海賊等或為宋人被殺

害為嶋引被擄取敢无散失物宋人等云偏

依聖教之威力也云

（第二帖奥書）

大日本国保安元年七月八日於大宰府勸俊源

法師書写畢宋人蘇景自高麗国奉渡聖

教之中有此法花伝仍□留兩本所令書写之

羊僧覺樹記之

此書本奥在此日記

本書の奥書は本奥書と考えられる。この本奥書によれば本書は、東大寺東南院九代院主で三論宗の学僧でもある覺樹の勧誘によって宋商の荘永・蘇景が高麗に渡り、壹岐嶋で海賊に遭遇しつつも逆に鎮圧して将来した義天版百卷余の一部であったことが知られる。また、本書の書写には、覺樹が俊源に勧めて書写させたことも知られる。

覺樹の関係する訓点資料は管見では本書を除くその多くが仮名点であり、ヨコト点資料としては東大寺点の資料が殆どである。一方、本書のヨコト点は築島博士の御論（『平安時代訓点本論考 研究篇』第一部第三章第十一節 池上阿闍梨点）によって第五群点・池上阿闍梨

点とされている。本書のヨコト点は星点のみで、この点からするならば、厳密に言えば第五群点ながら、池上阿闍梨点・経伝点・紀伝点などの孰れであるのか判別し難いところがある。その為、築島博士自体、前掲書の別の箇所（『平安時代訓点本論考 研究篇』第一部第一章 平安時代訓点本の伝存状態）で「ヨコト点には朱書で第五群点（紀伝・経伝）の星点のみを用る」とされている。但し、東大寺には、伝記関係資料としての『新脩往生伝』や法華経積資料の『法華経二十八品釈』など池上阿闍梨点の加點資料が多く、又、仏家点の中でこのような星点を備えたものとしては池上阿闍梨点のみであるため、そのような点から考えて本書のヨコト点も池上阿闍梨点と考えられる。この池上阿闍梨点是天台宗を源流とするものと考えられ、このことから覺樹と天台宗との関係が窺われるところである。この問題について、築島博士は以下に示す如く、書写者の俊源は天台宗比叡山谷流の僧侶で大原僧都相覺の弟子であって、ここに覺樹と天台宗比叡山との交流を予想されている。

『弘贊法華伝』の奥書に見える「俊源法師」を、相覺の弟子の俊源と同人と見るならば、「皇慶―勝範―定慶―相覺―俊源」（東寺金剛藏本天台血脈）と相伝した、天台宗比叡山谷流の僧であり、覺樹が天台宗比叡山と交流があったことを示唆するのではなからうか。

この問題を考えるにあたって、書写者である俊源に注目する必要がある

ある。この十二世紀前半期に活躍した俊源を調べるならば、右の天台宗山門派谷流の俊源以外にもその存在を確認することができる。平安遺文によれば、『永治二年(一一四一)一〇月二十九日東大寺牒案』に「得業伝燈大法師俊源」と署名しており(二四二五号)、『天養元年(一一四四)一〇月二日俊源已講去文』(二五四三号)に花押を据えている。これらから東大寺僧の俊源の存在が予想される。但し、これ

らの文書の「得業・已講」から俊源が維摩会堅者・講師経験者であることが分かり、『維摩講師研学堅義次第』を一覧したところ、永久四年条(一一一六)の研学堅義に「俊源十一月三十日宣下年四十三(二)一、廬三十、保延三年条(一一三七)の講師に「俊源年六十四 廬五十一、良慶擬講弟子 法相宗興福寺 式部卿大輔菅原在良息」

とある。この『維摩講師研学堅義次第』の記載から知られる俊源は興福寺僧となり、東大寺文書の記載とは合わず、又、東大寺僧として維摩会経験者の俊源も『維摩講師研学堅義次第』には見出し得ず、南都出身の俊源の存在を確認するに留まらざるを得ないところがある。

本書の書写者を右の南都僧の俊源とするならば、南都僧である覚樹・俊源やその周辺の僧侶が本書の如き天台宗山門派谷流所用の池上阿闍梨点で加点する積極的な理由は見出し得ず、又、その加点の背景の可能性として築島博士の指摘以外には、

- 1 東大寺東南院に伝わった本書が一旦は天台系の僧侶の元に渡って加点された後、再度、東大寺に戻った可能性
- 2 天台系僧侶が後で東大寺に来て本書に加点したという可能性

十二世紀における義天版の書写とその伝持について(宇都宮)

3 覚樹の書写本が比叡山でも書写され、その書写本に天台僧が加点了たものが東大寺に渡った可能性

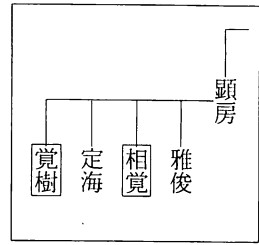
などが考えられるが、孰れの可能性も低いように思われる。寧ろ、築島博士が指摘されるように、最初の書写の段階から天台宗山門派谷流の僧である俊源が関与していたために池上阿闍梨点が付されたと考えられる方が可能性は高いものと思われる。

このことを踏まえるならば、次に、東大寺僧である覚樹がなぜ天台僧である俊源に『弘誓法華伝』の書写を行なわせたのかということが問題となる。『弘誓法華伝』の書写に関して、覚樹とその書写者である俊源は、覚樹の兄弟である相覚を通して繋がりを見出せるが、単に經典の書写ということのみに絞るならば、覚樹は東大寺において数多くの弟子を輩出しており、敢えて他宗派である天台宗山門派の僧侶である俊源を用いる必要はないものと思われる。それにも関わらず覚樹が敢えて他宗派の者に『弘誓法華伝』を書写させている以上、そこには何らかの繋がりが存しなくてはならない。そこで、覚樹・俊源・相覚の関係を『尊卑分脈』によって考えるならば、覚樹と相覚は兄弟(村上源氏・源頭房の息)であり(系図①)、俊源のいとこが源頭房の室(系図②)となることが知られる。

つまり、『弘誓法華伝』の書写はこのような血縁関係のもとで書写されていることが予想される。

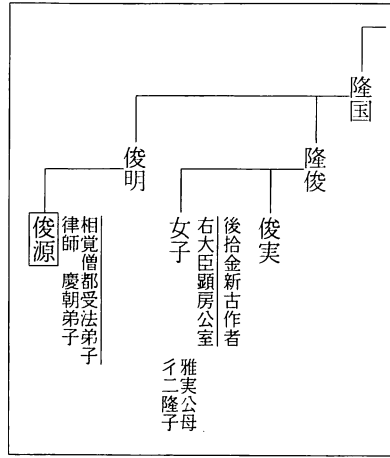
但し、更に考えるならば、この時期の覚樹は、東大寺末寺から離れ

〈系図①〉（『尊卑分派』）



て独自の経済活動を行っていた筑紫国の観世音寺を改めて領掌すべく九州に下向している時期であり、言わば、東大寺の経済基盤確立という重責を担った行動にあり、血縁関係のみで天台僧俊源が同行していたとは考えにくく、そこには何らかの政治的な問題が存するものと予想される。

〈系図②〉（『尊卑分派』）



『弘贊法華伝』における覚樹と俊源の問題については、ヲコト点の種類の問題や俊源自体の確定の問題など、今後とも検討が必要であり、これらの問題について、現時点で知り得た知見を提示し、諸分野からの知見に俟ちたい。

とは言え、少なくとも、義天版の輸入に参与した覚樹の『弘贊法華伝』に覚樹所用とは言い難いヲコト点が存することから、覚樹と他宗派または他の教学的系統との関係を窺わせ、義天版の流布と伝持の問題が覚樹という一個人、または覚樹の属した東大寺（東南院）という

宗派的な「一本筋」のみでは理解し得ないことが知られる。その意味で、本書に加点されていることの意味は大きいものと思われる。

『釋摩訶衍論通玄鈔』四帖（東寺観智院29-13） 田堂点

（巻第一奥書）

寿昌五年己卯歳高麗国大興王寺奉宣彫造

「嘉応貳年五月十四日於谷上移点了」

（巻第二奥書）

「嘉応貳年正月九日於谷上移点了」

（巻第四奥書）

「嘉応貳年四月二日」

正二位行権中納言兼大宰府師 藤原臣季仲

依仁和寺 禅定二品親王 仰遣

使高麗国請来即長治二年乙酉五月中旬従太

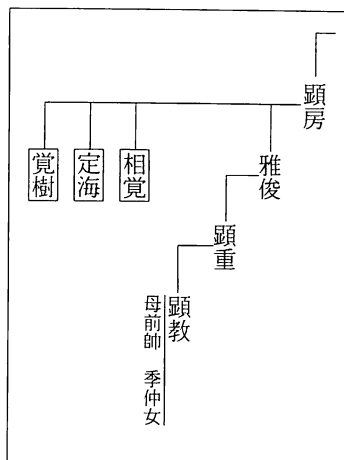
宰差専使奉請之行

（伝受識語）

各巻の巻尾より二紙目の表の右下に某字を擦消して「禅恵之」と重書し、更に巻第一の同所には「禅恵之」の左に「智海之」という書名がある。

本書は、嘉応二年（一一七〇）に高野山の谷上において移点された資料と考えられ、ここから義天版が高野山に伝わっていたことが窺わ

〈系図③〉(『尊卑分脈』)



に醍醐寺の頼照の弟子となり、更には定海からも受法した人物である。

また、『尊卑分脈』(系図③)によれば、禅恵の師である定海は先述した覚樹・相覚と兄弟であり、奥書の藤原季仲は覚樹・相覚・定海の一族である村上源氏と関係があり、藤原季仲の娘が覚樹・相覚・定海らの甥と婚姻関係を結んでいる。

ヨコト点は円堂点で、この円堂点が仁和寺所用のヨコト点であることから、先述の巻第四にある請来との関わりが窺われる。

『釋摩訶衍論贊玄疏』一帖(東寺觀智院29―6) 円堂点

(巻第一奥書)

天養元年十一月廿四日於仁和寺上乘院書了

(巻第五奥書)

正二位行権中納言兼大宰帥藤原朝臣季仲依

十二世紀における義天版の書写とその伝持について(宇都宮)

仁和寺禪定二品親王仰遣使高麗国請来

即長治二年西乙五月中旬從大宰差專使奉請之

本書も『釋摩訶衍論玄鈔』と同じく藤原季仲によって請来された版經の書写本で、天養元年(一一四四)に仁和寺の上乗院において書写されたものである。

『大毘盧遮那成佛神變加持經義釋演密鈔』一帖(大東急記念文庫)

(巻第一奥書) 喜多院点

寿昌元年乙亥歲高麗国大興王寺奉宣彫造

長承三年甲寅四月十三日以中川經藏本移点了

仏子玄信

「以摺本一校了」

(表紙識語：築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』)

この本は、奥書によれば、成身院本からの移点本であるが、巻第一の表紙の右下に「中川」とあるので、中川成身院と推定する。表紙左下に「理証院本」とあり(「理証院」は仁和寺塔頭か)、表紙中央下に「仁和寺／菩提院」の院があるから、おそらく仁和寺に伝はった本であらう。

本書の素性については、築島博士が指摘されている如く中川成身院本で仁和寺に伝わった本と考えられる。ヨコト点が喜多院点であるこ

十二世紀における義天版の書写とその伝持について（宇都宮）

とも、このことを裏付けるものと思われる。この奥書の玄信は『血脉類聚記』第四によれば、中川成身院実範の付法の弟子であり、先の東寺蔵『釋摩訶衍論通玄鈔』の伝持者であった智海（後の勸修寺理明房興然）と兄弟弟子にあたる（後掲の系図⑤）。

『大毘盧遮那成佛神變加持經演密鈔』三帖（石山寺） 喜多院点

（第二帖奥書）

寿昌元年乙亥歳高麗國大興王寺奉宣彫造

長承三年八月十七日於光明山寺書了

小野流経雅之本

両度交了

（第八帖奥書）

寿昌元年乙亥歳高麗國大興王寺奉宣彫造

長承元年十月十四日以摺本書写了

即二六了

経雅之本

本書の書写者であり、かつ、所持者である経雅は仁和寺と勸修寺・醍醐寺などにおいて活動した人物で、景雅・慶雅・京雅などの異名を持ち、⁽⁴⁾『血脉類聚記』第五によれば中川上人実範の弟子で浄慶房阿闍梨と号し、『傳法灌頂相承血脉』によれば「仁海—成尊—範俊—嚴覺—

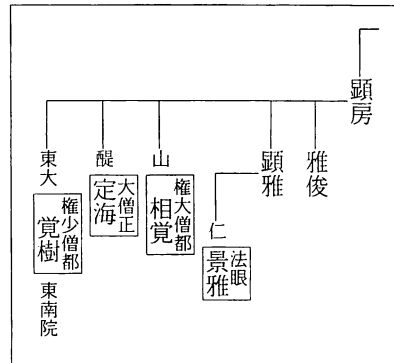
實範—経雅」とあり、小野流を汲んでいることが知られる。奥書の「光明山」は師である実範所縁の寺で、又、先の覚樹が院主となった東南院の別所でもあったところであり、覚樹との繋がりを窺わせる。

また、彼は『仁和寺諸院家記』華嚴院に記載されており、石山寺蔵『法花開題』（一帖：深密蔵一〇五函1号）の奥書においては「高野門流経雅之本」と記すなど幅広い活動をしていたようである。

この経雅は「尊卑分脈」（系図④）において「景雅」の名で村上源氏の流れで、先述の覚樹・相覚・定海らの甥として記載されている。

この経雅（景雅）が、義天版の書写・伝持の問題で更に注目すべきことは、次に示す義天版の目録たる『新編諸宗教蔵総録』（義天録）の所持者であったということである。

〈系図④〉（『尊卑分脈』）



『新編諸宗教蔵総録』二軸（高山寺）

（第一軸奥書）

安元二年丙申五月晦日以仁和寺花嚴院法橋景雅

御本書写了 明空

(第二軸奥書)

安元二年丙申六月四日以仁和寺花嚴院

法橋御本書之 明空

以他本校合了(花押)

奥書によれば、本書は経雅存命中の安元二年(一一七六)に彼の所有する『義天録』を明空が書写したことが知られる。先述の如く仁和寺の覚行法親王の命によって藤原季仲が請来した義天版やそれら諸経の書写本が仁和寺には伝来しており、同時にその目録たる『義天録』を仁和寺華嚴院の院主であった経雅が所有しているということは、その管理自体にも何らかの形で携わっていた可能性も考えられる。義天自身その開版に際して華嚴を宗としており、その義天版を、華嚴を宗とする華嚴院院主が管理すると云うことは相応しいことと思われる。また、この経雅が、大宰府に下向して義天版を請来した覚樹と一族であること(系図④)自体、このことを更に補強するものと思われる。

四、義天版の流布と諸宗交流

前項までのことを踏まえた上で、ここでは義天版の流布と諸宗交流の問題について検討したい。

四・一 義天版の輸入

十二世紀における義天版の書写とその伝持について(宇都宮)

仁和寺の覚行法親王の命による藤原季仲の請来とその伝持については、堀池春峰氏によって次の如く述べられている。⁽⁶⁾

即ち彼の一族は、受領層に属する家系であったが、祖父経通とい、叔父に当たる経平、顕家、資仲等四人が、ともに大宰帥・第貳としての経歴を有し、大宰府と因縁浅からぬ関係にあったことは、この一族を考察する上に見逃し得ない処であろう。特に季仲の従弟顕家の子である実範は、大和中川寺の開祖とし、かつまた南都戒律の中興の祖として著名な顕密の学僧であるが、この中川寺成身院経蔵にも義天版が存在していたらしいことは、『大毘盧遮那成仏神変加持経義积演密鈔』卷一の奥書により推知することが出来る。恐らくかかる一族の寺に義天版がもたらされたことは、季仲の大宰帥の在任中に彼の手を経て入手されたとする可能性がことに多いとせねばならないし、また、季仲による長治二年の輸入は、単に『釈摩訶衍論贊玄疏・玄鈔』二部にとどまらず、既刊の義天版ももたらされたと思つて誤りがないと思つのである。

十二世紀初頭における藤原季仲の請来とその伝来は、堀池氏の説かれるように、彼の一族と大宰府との関わりが大きいものと思われ、また、その血縁関係を通じて中川成身院の実範に伝来したであろうという示唆は非常に注目すべきものと思われる。

ついで、その二十年ほど後には、義天版の請来・書写に参与した覚

樹や、義天版を伝持した定海、義天版の書写・目録所有者の経雅らは孰れも村上源氏であり、先に提示した奥書・識語等に存する人々は、孰れもお互いに緊密な人間関係の中に存している。

例えば、先の『弘誓法華伝』の請求を例に考えても、その奥書から知られるように、覚樹は宋商の莊永・蘇景にその請求を依頼しており、そこには多大な費用を必要し、覚樹一個人が購入し得るものとは考え難い。そこで、このような義天版の請求には経済的にも政治的にも有力な援助者の存在が必要であり、その役割を覚樹らの出自である村上源氏が担っていたと考えることが可能と思われる。また、そうであるからこそ、義天版の書写者や伝持者が村上源氏を出自とする僧侶達を核としたその周辺の僧侶達であることにも説明がつくところである。

この点は、堀池氏が義天版輸入に関与した藤原季仲からその一族たる中川成身院実範へと伝持されていたことを述べられたことと同様の背景であり、自然なものとして理解できる。

村上源氏の一族は「源氏と雖も土御門右丞相（師房）の子孫は御堂（道長）の末葉に入る」（『台記』）と言われる如く、その祖である源師房が藤原頼通の嗣子となり、子孫がみな道長の外孫として藤原摂関家嫡流との深い血縁関係を持つために、院政期においては公卿の半数近くを占めるなど、摂関家に次ぐ清華家に列する家柄である。その村上源氏の中でも源顕房の一族が義天版の請求に核として関与し、それらの諸経を仁和寺等の真言系寺院に納めているということは、政治上

の問題としても興味深いものがある。

つまり、十二世紀における義天版の輸入はその経済的・政治的事情から村上源氏を背景とし、そこを出自とする僧侶達によって行なわれ、かつ、その書写や伝持に際しても、そのような俗界における血縁的紐帯を背景として、そこに法脈の問題も関わりながら行なわれていったものと考えられる。

そして、醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脈』によれば経雅も実範の弟子であり、『血脈類聚記』によって実範の弟子とされる重誉（系図⑤）も『東南院院務次第』から覚樹の弟子であることが知られるなど、

『東南院院務次第』

第十 少僧都覚樹

少僧都覚樹。右大臣源顕房公之子。幼学魯詰。稟三論

三密之教於慶信法印。俱究底微。（中略）長承元年五月

廿八日任権少僧都。保延五年二月十四日寂。歳五十一。

有門弟十一人。如寛信。

珍海。重誉。恵珍等。皆一時英傑也。

義天版の輸入と伝存に関わった藤原季仲から実範へという流れと村上源氏の流れという二つの流れがこの時期に大きく繋がっていることも確認される。

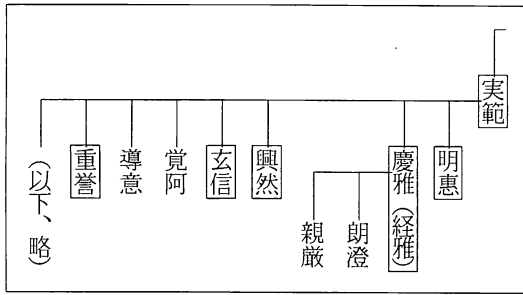
四・二 義天版の流布

更には、義天版の書写本が諸寺に流布していくことも、高山寺に關しては『血脈類聚記』から明恵が実範の弟子とされ（実際に学んでいないが、実範を慕っていた）（系図⑤）、且つ、明恵が『義天録』所持者であった経雅から華嚴を学び、義天版の書写・伝持者である興然から両部灌頂を学んでいることが関与しているものと思われる。勸修寺に關しては経雅が勸修寺で活躍していたという事実とともに、勸修寺理明房興然が実範の弟子であること、勸修寺法務寛信が覚樹の弟子であるなど、深い関係が窺われる。

又、先述の『釋摩訶衍論通玄鈔』の奥書「嘉応式年五月十四日於谷上移点了」から、義天版が高野山においても流布していたことが知られるが、この点も経雅が高野山において活躍していることや高野山月上院玄證の存在に注目される。

この玄證の法脈は下図の通りであり（系図⑥）、義天版流布に關与したと考えられる僧侶達との法脈上の緊密さが窺われる。

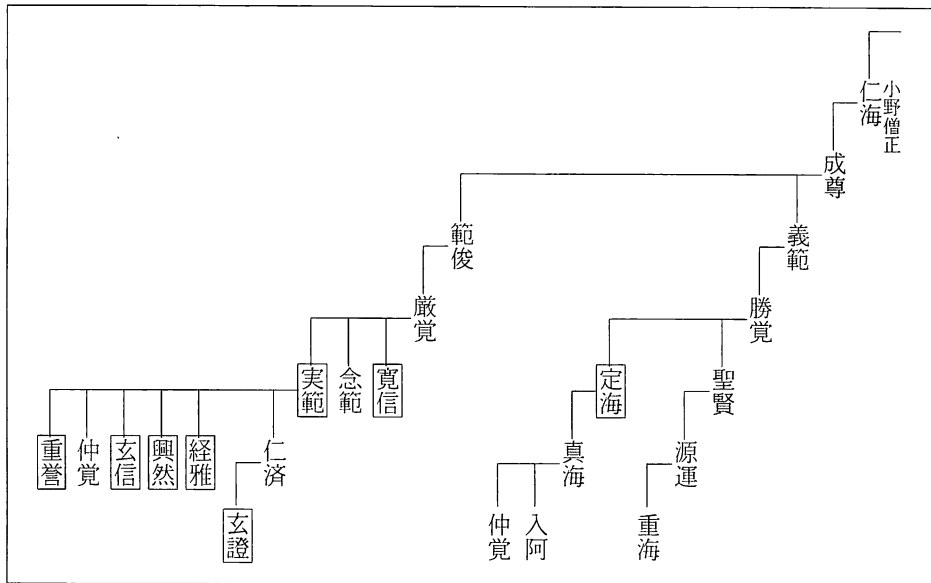
更には、高山寺経藏の中川成身院本、即ち、実範の法脈を継ぐ聖教



〈系図⑤〉 (『血脈類聚記』)

の多くが高野山月上院玄證に伝わっており、高野山における義天版流布のルートをここに想定することができそうである。

以上の如く検討した結果、義天版の書写・流布の問題には非常に緊密な人間関係が窺われ、村上源氏を背景とした東大寺覚樹・天台相覚・醍醐寺定海・仁和寺経雅らや、中川成身院実範といった単一の



〈系図⑥〉 (『伝法灌頂師資相承血脈』)

宗派に留まらない諸宗交流の実態が予想される。中川成身院は、『傳法灌頂師資相承血脈』や『元亨釈書』によれば、実範が初めに興福寺で法相を学び、後に醍醐寺で嚴寛（勸修寺寛信の師でもある）から受法し、また、山門横川の谷阿闍梨明賢に天台を学んでいることから『東大寺雜集録』に「中川寺 成身院本寺也 法相・真言・天台」とあるように、諸宗交流の場であったことが考えられ、そのような場に義天版を伝えた人々が関わっていることは、特定の僧侶集団による諸宗交流に基づく義天版流布の存在を予想させる。この点は、先述の高野山寺経藏の中川成身院本の多くを伝持する高野山月上院玄證からも述べることができる。玄證は、成身院本の他に證印（玄證の師：仁和寺広沢流・寛助―寛鑣―證印―玄證）本・觀賢（石山寺淳祐の灌頂の師）本・仁和寺浄光院本・延暦寺宝幢院本などの多くの本を伝持・書写をしており、その中でも、延暦寺宝幢院本の書写は、小野・広沢両流の法流を次ぐ玄證が天台宗山門派と関わっている点で中川成身院から高野山にかけての諸宗交流の実態が窺われるところである。

つまり、義天版の流布は当時の誰でも自由に書写・伝持できたといったレベルのものではなく、ましてや、聖教の売買による偶然的の移動から流布したものではなく、俗界の血縁関係や法脈といった確固とした背景の元に流布したものと考えられる。以上の結果は、次頁の〈義天版を巡る相関図〉として示した図によって、一層、視覚的に理解できるものと思われる。

そして、この点は堀池氏が義天版の輸入に関して「我國の貴族仏教が、如何に義天版をよりどころにし、新知見を得、教学の進展を計らんとしていたかを推知し得る」と述べておられるように、義天版が後代の仏教学に大きな影響を及ぼしたことを鑑みると、その主たる伝来が先述の人々に集約されている以上、そこを核とした諸宗の交流とその流布の実態が存したと考えることは首肯できるものと思われる。

五、経雅と勸修寺を巡る諸宗交流

前項から、義天版の書写・伝持の実態と諸宗交流の背景を検討した。その結果、義天版の書写・伝持に際して、俗界における血縁的紐帯が諸宗交流の要因の一つとなっていることが知られた。そして、このような義天版流布から窺われた血縁的紐帯に基づく諸宗の交流の問題は、他の場合にも存するものと予想され、義天版流布に関与したグループが他の場面（聖教の書写や訓読活動）にも関与しているものと考えられる。そこで、ここでは先述の経雅と彼が活躍した勸修寺に注目してこの問題を考えることとしたい。

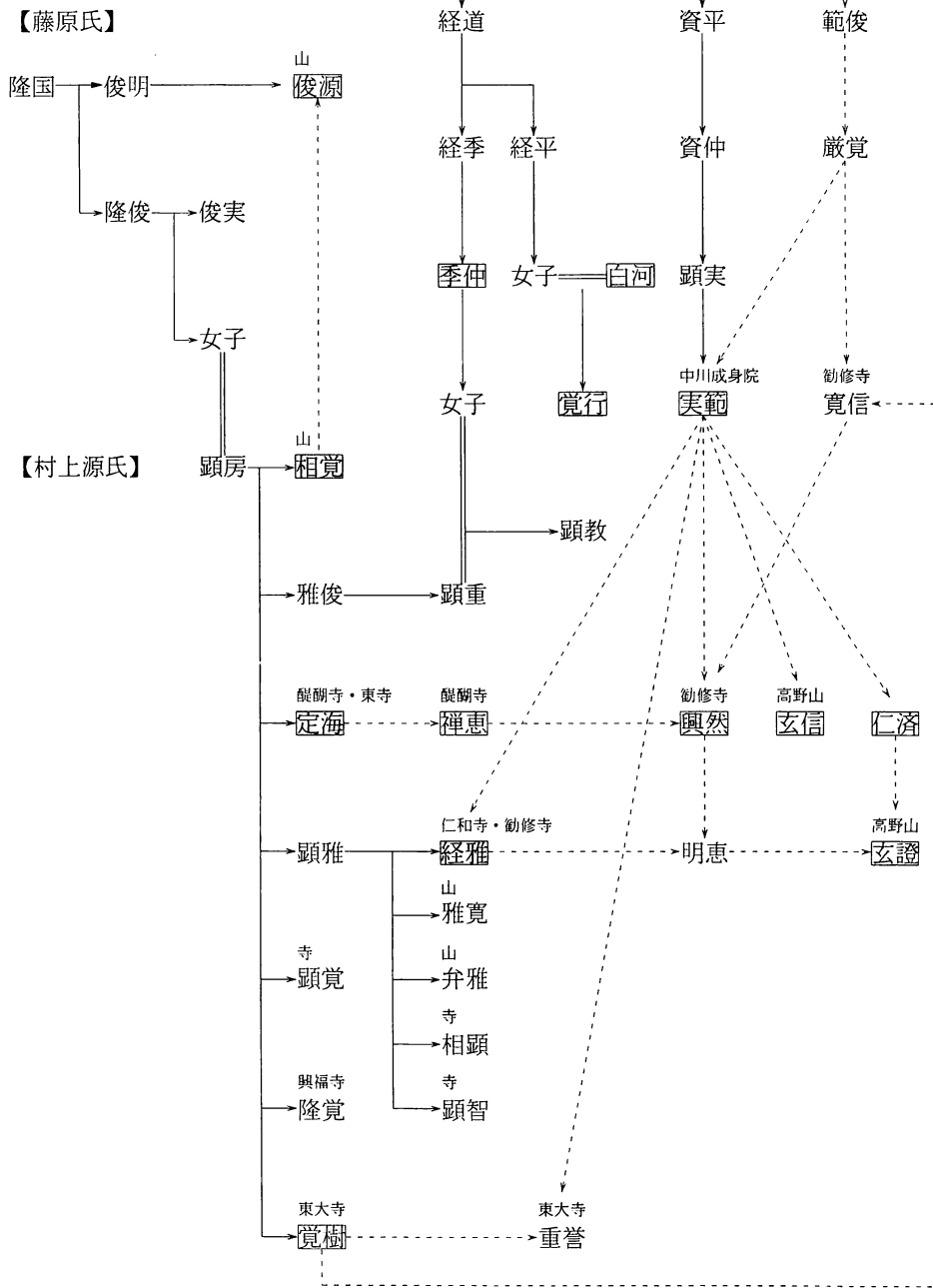
先述の如く、経雅は『大毘盧遮那成佛神變加持經演密鈔』三帖（石山寺）等の義天版関係聖教を光明山で書写するのみならず、義天録の所持者であり、仁和寺における義天版の管理を担っていたのではないかと述べたところである。つまり、経雅は十二世紀後半期における義天版流布のキーパーソンとも言うべき人物であり、この経雅と彼の活

〈義天版を巡る相関図〉

【真言宗小野流】

十二世紀における義天版の書写とその伝持について（宇都宮）

- 親子関係：親--->子
- 師弟関係：師--->弟子
- □内の人物は奥書に記載されている人物



躍した勸修寺を対象として、義天版の書写・伝持の場面以外においても諸宗交流の存在することを述べてみたい。

まず、経雅と他宗派との関わりを窺わせる資料としては、次の『阿吒薄俱元帥大将上仏陀羅尼經修行儀軌』が挙げられる。

『阿吒薄俱元帥大将上仏陀羅尼經修行儀軌』一帖 石山寺 西墓点
（卷上奥書）

嘉保二年（一〇九五）五月廿二日書了

〔^{朱也}以他兩本引合点了 慶雅〕

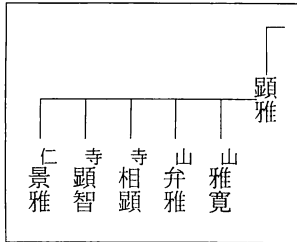
（卷下奥書）

嘉保二年十二月五日移点了

〔^{別本}之本〕

本書は、奥書の記述（「慶雅」・「^之本」）から慶雅（経雅）が伝持した資料であることが知られる。本書のヲコト点は天台宗寺門派所用の西墓点であり、ここに、経雅と天台宗寺門派との関わりが窺われる。

経雅と天台宗寺門派との関わりの強い点については、彼の兄弟である顕智・相顕らが園城寺にいたこともその要因の一つと考



〈系図⑦〉（『尊卑分派』）

えられる。

経雅所持として伝来している西墓点の聖教には本書の他にも天台宗寺門派寺院に散見され、経雅と天台宗寺門派との関わりが窺われる。

右の如き例から、経雅と他宗派との交流を訓点資料から窺うことができる。

次いで、経雅の活躍した勸修寺に注目して他宗派との交流の存在を確認してみる。

勸修寺は、先に示した〈義天版を巡る相関図〉から知られる人間関係の中でも寛信・興然・経雅らの活躍した寺院であり、諸宗交流の問題を考える上でも重要な寺院の一つと考えられる。

そこで、勸修寺における他宗派との交流を窺わせる資料として加点資料を検討すると、以下の如きものが見出される。

『一字頂輪王五念誦儀軌』一帖 石山寺 宝幢院点
（奥書）

久安六年（一一五〇）三月廿七日於勸修寺八幡宮御殿比交

他本也 （花押）

〔^{朱也}禅林寺東南院／経藏之書内也〕

本書は、勸修寺において宝幢院点を用いた例として貴重なものである。宝幢院点は、天台宗山門派谷流の僧侶を中心として使用されたヲ

コト点であり、勸修寺と天台宗山門派谷流との交流が窺われる。

このような例は、他にも次の資料から窺われる。

『聖観音儀軌』一帖 醍醐寺 円堂点・宝幢院点

(奥書)

久安三年(一一四七)六月十八日於勸修寺西山書之了

(朱)

久安五年(一一四九)九月比於金剛峰寺伝得之

(朱)

同日助阿闍梨御房伝受了

仁和寺末流覚禪

(別)

承安五年(一一七五)六月廿七日智定房伝受了

僧定秀

本書は、前半が仁和寺所用の円堂点であり、後半は、宝幢院点である。築島裕博士によれば、本書は「加点点者が円堂点を常用しており、宝幢院点に馴れてゐなかつたためであらうと思はれる。祖点が宝幢院点で、最初は円堂点に改点しつつ移点して行ったが、途中から祖点と同じ宝幢院点に切り替へたのであろう。」⁽¹⁰⁾とある。

勸修寺における諸宗交流の実態を知る資料としては、この他、識語に「権少僧都長宴^{定林寺}号大原僧都」とあって本来天台宗谷流に伝来していた

十一世紀における義天版の書写とその伝持について(宇都宮)

本に東大寺点を加点了した石山寺蔵『観音抄 大原僧都』なども存し、勸修寺における天台宗谷流との交流はこの時期に注目できるようである。その他、訓点のみならず奥書からも天台宗山門派谷流との関わりを確認できる資料として、勸修寺蔵に『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』が伝存している。

『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』一帖 勸修寺 宝幢院点

(奥書)

長曆二年七月八日於大原読了

覚□

寛徳三年正月九日於谷再重受了

応徳三年四月二日於智泉房互読了

沙門行玄

於長樂寺奉読了

智泉房は叡山の塔頭で、行玄は東寺蔵『天台血脈』によれば「皇慶一長宴一良祐一行玄」という天台宗山門派谷流の法脈を継いでいる。また、ヲコト点自体が天台宗山門派谷流の法脈を継いでいる。更に、右の奥書「大原」に注目すれば、経雅の叔父にあたる「大原僧都相覚」をも想起させる。

以上の如く、義天版の書写・伝来に関わった経雅・興然らが活躍している時期の勸修寺においては諸宗の交流が盛んに行なわれているこ

とが訓点資料の面から確認できる。そして、时期的に見て、この時期に寛信・興然・経雅が活躍している以上、このような義天版の書写・伝持の場面以外における諸宗交流の存在にも、彼ら、即ち、寛信・興然・経雅らや、更には義天版の書写・伝持者達が関与していることを窺わせるところである。

六、おわりに

以上、本稿においては、義天版の書写・伝持という問題から、訓点資料を手懸かりとした諸宗交流の問題にまで及んだ。

従来より、十二世紀に入ると、諸宗交流が盛んになることが先学によって指摘されているが、本稿では、その一つとして、仏教界における新知見の源となる義天版の流布自体が諸宗交流に關与する側面があり、そういった聖教の書写や移動、更には、訓読活動自体にも關わっているものと思われる。そして、そこに關わる各僧侶は、その出自も言うべき、俗界における血縁的紐帯(村上源氏)と彼らを核とした法脈で大きく繋がっていることを指摘した。既に述べた如く、義天版の請来には多大な資金を必要とし、単に僧侶一人によって行ない得るものではなく、そこには政治的にも経済的にも有力な援助者の存在が必要となる。それが白河院政下の村上源氏と考えられ、それ故に、その請求や書写、更には『義天録』所持という管理にまで村上源氏出身の僧が集中し、彼らが核となっているものと思われる。

院政期における諸宗交流の問題が本稿で述べた如きグループのみによって集約されるわけではないが、このグループの仏教界における位置やその背景となる政治的影響力、義天版自体の後代への影響力を考察するならば、本稿で述べたことは院政期における諸宗交流の問題としても微細な問題ではないものと思われる。

また、従来の仏書訓点資料における諸宗交流の問題は、各宗派間の血脈を利用するなど主として法脈を中心に考察するものであるが、本稿の如き場合には法脈のみならず、俗界における血縁的紐帯も重要であることが知られ、仏書訓点資料における訓読の問題やその伝受・伝持等に俗界における血縁的紐帯⁽¹⁾の観点を導入することが必要であると思われる。

稿者自身、そのような観点からの研究を志向しており、従来より聖教の書写と訓読との關わり、又、訓点資料の素性解明を行なっている⁽²⁾。平安・鎌倉時代における訓点資料の問題は、総合的に考えるならば訓読活動の問題であり、その訓読活動に用いた言語に注目すれば訓点語研究となり、その書写や伝受などに着目すれば歴史学や仏教学等と關わってくることは自然なものと思われる。その意味で、訓点資料の研究自体、諸分野の知見を統合して為されるべきものと思われる。そして、このような訓読活動の背景を明確にすることが、訓点資料の背景にある言語的環境の解明にも繋がり、一層、言語研究への進展が計れるものと思われる。

今後とも、右の如き立場からの研究を行なっていきたいと考える。
諸分野からの御叱正・御指導を仰ぎたくお願い申し上げる次第である。

註

(1) 『平安時代訓点本論考 研究篇』 第二部第四章第四節 円堂点(汲古書院 平8・5)

(2) 『平安時代訓点本論考 研究篇』 第二部第三章第十一節 池上阿闍梨点

(3) この時期の事情については次の論考で詳しく述べられている。

堀池春峰 『南都仏教史の研究』 「高麗版輸入の様相と観音寺」

(4) 大屋徳城 『影印^{高山}新編諸宗教蔵総録』 (便利堂 昭11・7) 解題

(5) 大屋徳城 『影印^{高山}新編諸宗教蔵総録』 (便利堂 昭11・7) 解題

(6) 『南都仏教史の研究』 「高麗版輸入の様相と観音寺」

(7) 醍醐寺本 『伝法灌頂相承血脉』・『血脉類聚記』 に基づいて、築島裕博士作成。

『平安時代訓点本論考 研究篇』 第一部第六章 中川成身院本について

(8) 『南都仏教史の研究』 「高麗版輸入の様相と観音寺」

(9) 勧修寺と天台宗寺門派との関わりについては、寛弘八年(一〇一一)に

勧修寺の済信が従来の慣例を破って他流の者(園城寺の永圓)に讓官(権律師)したことが初例であると東寺蔵 『勧修寺長吏并当寺別当任東寺長者次第』

(290-11) に見え、この背景には済信と永圓とが血縁関係(永圓が済信の甥)であったことに注目される。かくの如く、勧修寺と天台宗寺門派との関わり

には、早い時期から血縁的紐帯の側面の存することが知られる。

(10) 『平安時代訓点本論考 研究篇』 第二部第四章第四節 円堂点

(11) 血縁的紐帯が院政期における寺院勢力の形成やその活動に大きく関与していることについては歴史学の分野においても指摘が行われている。例えば、経雅の活動拠点となっていた仁和寺に関しては横内裕人氏による研究が存す

十二世紀における義天版の書写とその伝持について(宇都宮)

る。横内裕人「仁和寺御室考―中世前期における院権力と真言密教」『史料』79-4 平8)

(12) 拙稿「興聖寺一切経における訓点資料について―その素性を巡って―」

『鎌倉時代語研究』25 平12・10)

拙稿「東明寺蔵『大般若波羅蜜多經』について―その素性を巡って―」

『南都仏教』79 平12・11)

〈追記〉本稿は、平成十三年度広島大学国語国文学会春期研究集会(平成十三年六月十七日)の発表に基づいている。

成稿に際しては、勧修寺・東寺宝物館・東大寺図書館御当局より資料閲覧の機会を賜わった。厚く御礼申し上げます。

(うつのみや・けいご) 大谷女子大学助教授